

それらは晩年の十六世紀初頭作というが、真偽のほどは不詳。それから数十年後、日本の禅僧や医家の知識階級層では、神農画賛の製作・贈答が盛行するようになった。その情況は当時の名僧月舟寿桂（一四六〇—一五三三）の遺した諸々の神農画賛史料からうかがえる。また月舟は『史記』扁倉伝注で神農を説くに『医経溯洄集』と『医学源流』を引用している。伝雪舟筆も含め当時の神農図案には『歴代君臣圖像』（一四八七・一五二五刊）など一連の中国明刊聖人図録に拠ると思われるものも多い。

安土桃山から江戸初にかけてついにこの風習は日本の医葉関係者の間に定着し、以後幕末に至る。曲直瀬道三が熊宗立賛を引用した神農画賛（一五八八）をはじめ、玄朔・玄淵・玄著など歴代道三の賛になる神農画は数多く伝存する。加えて本口演では、王韃南・沢庵宗彭・徳川綱吉・山脇玄修・半井成明・山脇東洋・亀田鵬斎・多紀元堅・谷文晁・久志本常珍・田能村直入など歴代名士の画賛になる作例を供覧に付す。

（平成六年二月例会）

（追記）本発表の後、演者はさらに資料を探索し考察を進めた結果、右では言及しえなかつたいくつかの新知見を得た。その成果はすでに論文にまとめ、来年初に刊行予定の次の書に登載されることになっているので、詳細はそれによらねたい。斯文会刊『神農五千年』所収拙稿「神農と医葉」

（第二節「医葉文献にみる神農画賛の歴史」）。



紹

介

吉岡郁夫・長谷部学著

『ミルンの日本人種論—アイヌとコロボクグルー—』

日本人の起源に関する研究は、明治初年のお雇い外国人教師等によって始められた。中でも人体計測による資料に基づいて近代人類学を創始したベルツの功績は大きい。ベルツ以前の研究者としてモース、ハイリッヒ・シーボルト、ジョン・ミルンの名を忘れることはできない。ベルツがこれらの人々から影響を受けたであろうことは夙に著者の指摘するところである。

ミルン、モース、シーボルト等は考古学的・民俗学的資料を基として研究を進めたが、中でもモースによる大森貝塚の発見は有名で、ミルンの名はその影に隠れて人々にあまり知られていない。著者はミルンの足跡を詳しく調査して、その業績がモースに劣らぬものであることを確認し、この方面におけるミルンの業績が再評価されることを願っている。

本書の構成は二部に分れ、第一部ではミルンとその時代の外国人教師等による研究業績が紹介され、それに著者の論評が加えられている。第二部ではミルンの論文五編が翻訳掲載されている。

第一部。明治九年、工学寮の地震学・鉱山学の教師とし

て招聘された英国人ジョン・ミルンは、考古学・人類学・博物学に強い興味を抱いていた。着任後、北は千島列島最北端から南は九州に至るまで、日本全国を旅行して火山や鉱物の調査を行った。その傍ら、遺跡・遺物・民俗等にも探索の手を伸したのである。

一方、ミルンより一年遅れて来日したモースは、来日の翌日、車中から大森貝塚を発見して三ヶ月後にそれを発掘した。同じ頃H・シーボルト並にE・ナウマンも附近の貝塚を発掘調査している。

モースの調査報告は明治十二年に英文で発表され、これが日本最初の遺跡調査報告書となった。ミルンはモースの遺跡発掘に強い刺激を受けたと思われる。

明治十一年七月にはモースとミルンは北海道へ赴き、シーボルトもこれに続いている。ミルンは八月中、釧路・根室・千島列島の調査をし、本道に帰ってから函館・小樽の調査をして、これらの調査結果を明治十三年から十五年の間に英文で発表した。北千島を調査した研究者はミルンが最初で、明治三十二年に鳥井龍蔵が行くまで誰も訪れていない。これらの報告書では北海道・千島のみならず、日本の先史遺跡全般にわたって述べられ、更に日本人種論に及んでいる。

彼は、この調査に基づいて北海道・千島におけるアイヌの先住民族をコロポクグルと推定した。日本本土については先住民族をアイヌとし、貝塚はアイヌが遺したものとした。

ミルンによれば、アイヌはかつて日本本土に住んでいたが、

南から北上して来た日本人によって北方へ追われ、北海道に至った時、先住民族であるコロポクグルを千島・カムチャツカ方面へ追い払ってその跡へ定住したという。アイヌの祖先としてはニューギニアのパプア族との関係を臆測し、これを駆逐した日本人は朝鮮から渡来したモンゴロイドであろうと述べている。

彼はまたモースが発見した大森貝塚の年代推定に情熱を燃やし、これに独自の方法を考案した。大森貝塚は多摩川デルタ地帯にあり、海岸線から約八百米陸側にある。貝塚形成時にそこは海岸線に位置していたとして、何年かかって八百米の距離を堆積したのか。彼は堆積の速度を数枚の古地図を重ねて測定し、二千六百年前とした。しかし日本史を参考にしたので最終的には二千年〜千五百年前のものと決定した。現代の科学的な測定法によれば四千年〜三千年前のものとされている。しかしこのような測定法がなかった当時、古地図の利用という独自の方法をあみだしたのは賞賛に値する。

ミルンの日本人種論は当時としては非常に優れた説であった。その発想は日本歴史や社会的背景に囚われない自由なもので、彼の業績は我国の人類学創立に大きな役割を果たしている。

また明治十三年二月、死者二名を出す東京湾地震が起った。これ以降、彼は地震学の研究に没頭し、同年世界で最初の地震学会を設立し、これに多大の私財を投じた。

本書は学術書ではあるが、平易な言葉で簡明に記述され、

研究者は勿論、一般人にとっても、この時代におけるミルンはじめモースやシーボルト等の人類学的・考古学的業績を探索するにあたり良い手引書となるであろう。項目ごとに引用文献が明記してあることは有難い配慮である。また第二部に原著の翻訳が載せられていることは本書の価値を一層引き立てるものである。

本書は斯学の入門書としては勿論、一般教養書としても広くお奨めしたい好著である。

(戸出 一郎)

〔雄山閣出版、東京都千代田区富士見二一六―一九、電話〇三―三二六二―三三三二、一九九三年、B 6判・二五六頁・定価二八〇〇円〕

堀内 冷著『兵庫医史散歩』

著者は婦人科専門医であり、現在も臨床にたずさわっておられるが、本学会会員、関西支部会員としても古い。特に「七福神の戎っさん」に関するあらゆる品々のコレクターとして、わが国で最も数多くの史料を私蔵される人物である。年頭には西宮市白鹿記念酒造博物館において私蔵の特別展示が毎年公開されている。医史学関西支部、医学切手友の会関西支部会員達も新年恒例として、きき酒、かす汁の接待につられ、毎年多くの参加者を見る。平成六年の特別展は「吉祥・福の神」と題し、戎の他に「宝船に関する」ものの初公開が注目

されている。本書の文中には単にコレクターとしてでなく著者の該博な知識を生し西宮の郷土史にあたる「戎さん」の代名詞西宮神社由来をはじめ、民間医療信仰について記しさらに屠蘇の由来等、民俗学の領域まで詳細に記している。

本書は兵庫県下の医史につき著者自身が30年間の長きにわたって集めた資料の中から、平成元年八月号『兵庫県医師会報』より35回にわたり連載されたものをまとめて刊行された。従って医史学に関心と親しみを持つ者に、医神、儒医、系脉、寿命、皮下注射等の歴史を各タイトル毎に簡潔にして明瞭に説明している。

著者としては更に詳細な記述を望まれたであろうが、連載物と本書のページ数からしてやむ得なかつたと推察する。さらに兵庫県下の疾病史から赤十字社、兵庫県医会、医師会の諸史料について地方新聞郷土雑誌より多くの資料を掘りおこし詳細に記している。特に県下の著名な医人のプロフィールについては、著者の尼崎藩医を祖とする堀内静一を始め、岡白駒、田中信謹、原老柳、川本幸民、深山玄碩、飯田稔隠、鶴崎平三郎、深山杲、につき記述、さらに神戸に立寄ったコッホ、野口英世の県下での詳細な追跡調査も載せている。書評の筆者は特に眼科史に関心を持つ者であり眼科の項目、さらにこの文中、谷川良三及び兵庫県出身の河本重次郎、次いで京の医師新宮涼庭に関連した、原老柳、京都府下の門下生を多く擁した川本幸民の各プロフィールの項については特に関心をいだかされた。県医師会史、県医人史をはじめ民俗学